名古屋芸術大学研究紀要第34巻　127～138頁（2013）

2012年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察

Psycho-Educational and Psycho-clinical Examinations of New Students' Replies to the Questionaire Conducted by Center for Student Counseling (2012)

北岡　智子 *Tomoko Kitaoka*
（非常勤学生相談室員）
佐藤　勝利 *Katsutoshi Sato*
（学生相談室長・兼任学生相談室員・人間発達学部）
木村美奈子 *Minako Kimura*
（兼任学生相談室員・デザイン学部教養部会）
菅嶋　康浩 *Yasuhiro Sugajima*
（学生部長・デザイン学部教養部会）
粟津　幹子 *Mikiko Awazu*
（非常勤学生相談室員）
伊藤　由夏 *Yuka Ito*
（非常勤学生相談室員）
林　美由記 *Miyuki Hayashi*
（非常勤学生相談室員）
山内恵理子 *Eriko Yamauchi*
（非常勤学生相談室員）

大学への進学率ならびに大学の収容力は、1992年度にはそれぞれ約39%、60%であったが、2011年度には進学率が約51%（2012年度学校基本調査速報では、短大を含めると56.2%である）、収容力が92%を示している。昨今では「大学全入時代」の大きな波の中で、あるいはまた、2005年に施行された発達障害者支援法や国の特別支援教育への積極的取り組みの影響に伴い、多様な学生が大学に入学するようになった。

実際、本学でも、重い精神疾患や、発達障害を抱えた学生に出会うことは少なくない。また、「わたしとは何か」といった課題に向き合い悩むことは、本来、誰しも一度は通るであろうはずの思春期の課題であるが、これらを達成することなく、大学に進学し、「遅れてきた思春期」の課題に直面する学生もいる。このように昨今の学生の抱えている問題は多層的になっている。

このため、学生相談室は従来の「治療モデル」から脱却し「教育モデル」「成長モデル」に則った教育支援が必要であると言われている（山岸, 2012）。

中学・高校へのスクールカウンセラー導入により、学生相談室は以前より身近な存在に

表1　回答者および回答率

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエイター	美術文化	計			
入学者数	77	72	149	55	15	18	2	90	188	121	548
回答者数（%）	76（98.7）	65（90.3）	141（94.6）	53（96.3）	13（86.7）	18（100.0）	2（100.0）	86（95.6）	177（94.1）	121（100.0）	525（95.8）

表2　1. これまでの生活について

1−1　高校時代の生活を振り返って全体として

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
満足であった	59.2	52.3	56.0	35.8	61.5	33.3	50.0	39.5	48.0	52.9	49.9
どちらかといえば満足であった	26.3	29.2	27.7	41.5	23.1	38.9	50.0	38.4	32.2	33.9	32.4
どちらともいえない	13.2	12.3	12.8	17.0	7.7	11.1	0.0	14.0	14.1	9.1	12.6
どちらかといえば不満であった	1.3	3.1	2.1	1.9	7.7	11.1	0.0	4.7	1.7	3.3	2.7
不満であった	0.0	3.1	1.4	3.8	0.0	5.6	0.0	3.5	4.0	0.8	2.5
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

1−2　受験生活（高校時代および浪人）をふり返って

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
満足であった	42.1	29.2	36.2	28.3	15.4	16.7	50.0	24.4	24.3	18.2	26.1
どちらかといえば満足であった	30.3	30.8	30.5	39.6	46.2	11.1	0.0	33.7	31.6	33.9	32.2
どちらともいえない	17.1	33.8	24.8	18.9	30.8	44.4	50.0	26.7	28.2	38.8	29.5
どちらかといえば不満であった	5.3	3.1	4.3	3.8	7.7	11.1	0.0	5.8	13.6	3.3	7.4
不満であった	5.3	3.1	4.3	9.4	0.0	16.7	0.0	9.3	2.3	5.8	4.8
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

なってきていると思われる。しかし、新入生にとっては、なお敷居の高い未知な領域でもある。自ら援助を求めてくる学生に対応することは、学生相談室の役割の中で最も中心におかれているが、潜在的に困難を抱きながらも他者に援助を求めることができないでいる学生に対しても過不足なく支援の手を差し伸べることが学生相談の重要な任務であるという指摘もある（山岸, 2012）。

本学生相談室でも、多様化する学生のニーズに応え、より効果的な“支援”ないし“より積極的な働きかけ”を学生に行うために様々な企画を試みている。企画された試みの１つとして、本学の新入生にアンケートによる実態調査を行ってきた。『どのような“これまでの生活”を送ってきており、どのような“本学への志望から入学まで”を経験してきており、どのような“本学での生活”を希望しており、どのような“現在の心境”をもっているか』についての実態調査である。そして、その結果を「教育臨床心理学」ないし「教育現場における心理臨床」の視点から検討しようとしてきた。その概要は既に報告してきた（後藤他, 2007、佐藤他, 2008、2009、2011、橋本他, 2010）。

今年度は例年の質問項目に新たな項目を加えて調査を行ったので、ここに報告する。

調査の概要

（１）調査方法：2006年より毎年実施している質問紙「相談室アンケート」（後藤他, 2007）の調査の一部の項目に新たに具体的に困っている内容の選択肢を付加した質問紙調査。（前年度までは、自由記述により学生が困っていることを記入する形式を取っていたが、記入率は低く、具体的に困っている内容が把握しにくいため、本年度から「４．現在の心境について」の第２項「４－２　困っている内容」に関して、学業、家族の問題、経済的問題、進路、友人関係、心身の状態、その他の７つの選択肢を付加し、３項目以内で選択できるように改めた。）

（２）調査日時：2012年４月７日実施の学生相談室ガイダンスの際に実施した。

（３）調査対象：2012年度入学生全員（548名）

結果と考察

１．調査回収率

調査への回答率（回収率）を**表１**に示した。大学全体では95.8％の回収率であった。過去６年間の回収率は、学部、学科間で若干のばらつきはあるが、大学全体では90～95％にあり、本年度も例年通り良好な回収率を示している。

表3　2. 本学への志望から入学まで

2−1　本学への受験を決定したのは

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン	人間発達	名芸大
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計	学部	学部	全体
中学時代（それ以前）	18.4	6.2	12.8	0.0	7.7	5.6	0.0	2.3	2.3	0.8	4.8
高校1・2年	36.8	29.2	33.3	32.1	38.5	11.1	100.0	30.2	31.1	18.2	28.6
高校3年	34.2	53.8	43.3	47.2	46.2	61.1	0.0	48.8	57.6	66.1	54.3
浪人時代	0.0	4.6	2.1	7.5	7.7	0.0	0.0	5.8	2.8	1.7	2.9
願書を出す頃	7.9	3.1	5.7	11.3	0.0	16.7	0.0	10.5	5.1	12.4	7.8
一旦就職してから	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.2
他大学に在学中	0.0	1.5	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.4
その他・無回答	2.6	1.5	2.1	1.9	0.0	5.6	0.0	2.3	0.0	0.8	1.1

2−2　本学の今の学部（学科）を選んだ理由は（3つ以内）

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン	人間発達	名芸大
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計	学部	学部	全体
社会的評価が高いから	0.0	0.0	0.0	5.7	0.0	5.6	0.0	4.7	3.4	4.1	2.9
指導を受けたい教員がいるので	64.5	16.9	42.6	9.4	7.7	11.1	50.0	10.5	2.8	2.5	14.7
就職・将来を考えて	42.1	55.4	48.2	24.5	30.8	22.2	50.0	25.6	52.5	77.7	52.8
本学(学部)の特徴が自分の性格に合っているから	21.1	55.4	36.9	58.5	53.8	55.6	50.0	57.0	60.5	31.4	46.9
合格の可能性を考えて	11.8	9.2	10.6	22.6	23.1	50.0	0.0	27.9	29.4	28.9	24.0
他大学を受験したが入試の結果で	5.3	9.2	7.1	22.6	23.1	16.7	0.0	20.9	26.0	16.5	17.9
通学距離、家庭の事情で	7.9	7.7	7.8	24.5	23.1	11.1	0.0	20.9	22.0	16.5	16.8
本学に身近な出身者がいるから	21.1	7.7	14.9	13.2	15.4	11.1	0.0	12.8	8.5	9.9	11.2
何となく	2.6	1.5	2.1	3.8	0.0	11.1	0.0	4.7	1.1	3.3	2.5
その他・無回答	5.3	6.2	5.7	7.5	15.4	11.1	0.0	9.3	3.4	5.0	5.3

2−3　本学（学部）に入学して、あなたの気分は

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン	人間発達	名芸大
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計	学部	学部	全体
満足である	56.6	44.6	51.1	39.6	23.1	50.0	50.0	39.5	32.2	39.7	40.2
どちらかといえば満足である	27.6	38.5	32.6	35.8	30.8	22.2	50.0	32.6	37.3	37.2	35.2
どちらともいえない	10.5	15.4	12.8	15.1	23.1	22.2	0.0	17.4	16.9	19.0	16.4
満足ではないが、このままで、頑張りたい	5.3	1.5	3.5	3.8	23.1	5.6	0.0	7.0	11.9	3.3	6.9
できれば転学部(転学科)したい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
できれば他大学を再受験したい	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	2.3	1.7	0.8	1.1
その他・無回答	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.2

表4　3. 本学での生活について

3−1　履修の方法や勉学の仕方について

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
よくわかる	1.3	1.5	1.4	0.0	0.0	5.6	0.0	1.2	4.0	4.1	2.9
だいたいわかる	25.0	15.4	20.6	13.2	0.0	5.6	0.0	9.3	36.2	14.9	22.7
少しわからないところがある	38.2	52.3	44.7	56.6	76.9	38.9	50.0	55.8	50.3	30.6	45.1
ほとんどわからず不安である	35.5	30.8	33.3	30.2	23.1	50.0	50.0	33.7	8.5	49.6	28.8
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.8	0.6

3−2　勉学に対する意欲は

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
充分ある	76.3	61.5	69.5	66.0	53.8	55.6	0.0	60.5	65.5	59.5	64.4
少しある	18.4	33.8	25.5	30.2	30.8	27.8	0.0	29.1	25.4	30.6	27.2
どちらともいえない	3.9	3.1	3.5	3.8	15.4	16.7	0.0	8.1	5.6	7.4	5.9
あまりない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	1.7	0.8
まったくない	1.3	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.4
無回答	0.0	1.5	0.7	0.0	0.0	0.0	100.0	2.3	2.3	0.0	1.3

3−3　（学内・学外を問わず）現在、親しい友人が

（数字は%）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
同性にも異性にもいる	39.5	50.8	44.7	30.2	23.1	44.4	100.0	33.7	42.9	40.5	41.3
同性のみいる	52.6	35.4	44.7	50.9	46.2	44.4	0.0	47.7	48.0	46.3	46.7
異性のみいる	1.3	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.6
ほとんどいない	6.6	10.8	8.5	17.0	30.8	0.0	0.0	15.1	7.3	11.6	9.9
その他	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	11.1	0.0	3.5	0.6	0.8	1.0
無回答	0.0	3.1	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.6

2. これまでの生活について

「高校時代の生活」を振り返っての満足度を**表2**に示した。全体ではほぼ83%の新入生が、「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と回答しており、「どちらかといえば不満であった」「不満であった」とするものは、各学部とも、10%を下回っている。この傾向は、調査開始以来一貫しており、本学入学者の「高校時代の生活」に対する満足度の高さを示している。また、2010年度の調査結果と同様に各学部間のばらつきが見られ、<美術学部>の新入生の高校時代の満足度は他学部に比べ最も低く、77.9%に留まっている。各学部内の数値に目を向ければ、<美術学部>の【アートクリエイター】の入学者のそれは72.2%と他学部・コースに比べ低くなっている。また【アートクリエイター】の入学者には「どちらかといえば不満であった」「不満であった」とするものが16.7%含まれている。美術学部の領域は、他学部・領域より、母数が小さいために、一義的な意味付けは避けるべきであろうが、新入生の学生相談室の利用率が<音楽学部><人間発達学部>より<美術学部><デザイン学部>が例年高くなることからも、相談室としては注意をしていく必要がある。

一方、「受験生活」を振り返っての満足度については、「満足であった」もしくは「どちらかといえば満足であった」と回答した者は58.3%であり、調査開始以来最も低い割合となった（07年度68.9%→08年度60.5%→09年度63.1%→10年度66.3%）。細部を見ると、<人間発達学部>の新入生では「高校時代の生活」の満足度は高いにもかかわらず(86.8%)、「受験生活」に対して「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と回答している者は52.1%となっている。後藤他（2007）が指摘したように、満足度が高い高校時代を送ってきてはいるものの、必ずしも受験生活に満足してこなかった様子である。また、2009年度同様に<美術学部>の【アートクリエイター】の学生の「受験生活」の満足度は低く、「満足であった」「どちらかといえば満足であった」とする者と「不満であった」「どちらかといえば不満であった」とする者との双方が27.8%と拮抗している。

これらの結果が、本学への入学者がストレルフルな受験時代や不本意な入学などを物語るのか、あるいは一般的な（健康的な）「受験」に対する否定的反応の表れに過ぎないのかを即断することは出来ない。ただ、2011年度では、1年次での退学者は全退学者の33.8%を占めていた。相談室としては10%以上の1年生が『受験生活に「不満であった」「どちらかといえば不満であった」』と回答しており、その存在に注目する必要があるように思われる。学生相談室が教職員と連携しながら不満や葛藤の強い学生に対して、積極的な支援を進めるべき転換期にきていると考えられる。

3. 本学への志望から入学まで

「本学への受験を決定した時期」、「学部・学科の選択理由」ならびに「本学入学後の気分」について尋ねた結果を**表3**に示した。

「本学への受験を決定した時期」としては、例年と同様で「願書を出す頃」を含めた高校時代とする者が圧倒的に多い（全体90.7%）。「本学への受験を決定した時期」に、学部間の差異が大きい点も例年までと同様である。＜音楽学部＞＜美術学部＞＜デザイン学部＞では、33%以上の者が「中学時代（それ以前）」および「高校１・２年」時に、本大学への受験を決定しているが、＜人間発達学部＞では18%に過ぎず、80%近くが「高校３年生」「願書を出す頃」に本学への受験を決めている。これらの結果は、芸術学部と幼児・教育系学部の特質の差を端的に反映したものと考えられる。

「学部・学科の選択理由」（複数選択＝３項目以内）は、大学全体としては、「就職・将来を考えて」が第１位（52.8%、例年は50%程度）、次いで「本学の特徴が自分の性格にあっているから」が第２位（46.9%、例年40%程度）、以下は「合格の可能性を考えて」（24.0%、例年25%程度）、「他大学を受験したが入試の結果で」（17.9%、例年15%程度）、「通学距離、家庭の事情で」（16.8%、例年20%程度）という順で選択され、過去６年間、選択順位・選択率ともに大きな変化は見られない。

学部、コースごとの詳細を検討すると＜音楽学部＞では「指導を受けたい教員がいるので」（42.6%）、「就職・将来を考えて」（48.2%）と高く、特に【演奏学科】は「指導を受けたい教員がいる」（64.5%）は高く、「本学に身近な出身者がいるから」（21.1%）という理由で選択する学生もいる。これは、＜音楽学部＞には、特定の教員の指導を求めて、早い段階から、本学を志望する者が少なからず存在することは注目に値する。これはこの学部の特殊性を反映するものかもしれない。＜美術学部＞＜デザイン学部＞では「本学の特徴が自分の性格にあっているから」を選択する者が多い（約60%）が、＜人間発達学部＞では80%近い者が「就職・将来を考えて」を挙げている。ここにも、学部間の専門の違いが選択の違いに反映しているように思われる。「就職・将来を考えて」本学へ入学してきた者は、名芸全体で最も高いことから、この希望に大学がいかに応えていくかが今後の課題としてある。少子高齢化や不景気といった国内情勢の変化もあり、本学で習得した専門性（芸術、教育）を活かしきれずに就職活動を行う者は少なくない。学生の中には期待していた就職とは違うことで、大きな失望を抱く者もいる。また、就職活動そのものにイメージを持つことができない者もいる。「就職・将来を考えて」入学してきた学生に対して、キャリアプランなどを教職員と連携を取りながら、学生相談室からも丁寧な支援が今後さらに必要になると考えられる。

「本学（学部）入学後の気分」については、表３の２－３に結果を示した。全体として75%以上の者が「満足である」もしくは「どちらかといえば満足である」と答えており、例年までと同様、本学への入学を満足する者の割合は高い水準であるといえよう。しかし、相談室としては、「満足でないが、このまま頑張りたい」とする者が6.9%、「できれば他大学を再受験したい」とする者が1.1%とわずかながら存在する結果を見過ごしてはならないと考えている。

表５　4. 現在の心境について

4−1　自分の性格・健康・家族・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすることが

（数字は％）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
大いにある	10.5	10.8	10.6	20.8	23.1	11.1	0.0	18.6	10.7	5.8	10.9
少しある	55.3	49.2	52.5	58.5	53.8	83.3	50.0	62.8	58.8	53.7	56.6
ない	34.2	40.0	36.9	17.0	23.1	5.6	50.0	16.3	29.9	38.8	31.6
その他、無回答	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	2.3	0.6	1.7	1.0

4−2　困っている内容（3 つ選択）

（数字は％）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
学業	47.4	35.4	41.8	52.8	61.5	66.7	50.0	57.0	41.2	39.7	43.6
家族の関係	3.9	4.6	4.3	5.7	7.7	5.6	0.0	5.8	2.8	2.5	3.6
経済的問題	14.5	15.4	14.9	28.3	15.4	22.2	0.0	24.4	23.2	9.9	18.1
進路	32.9	21.5	27.7	41.5	30.8	44.4	0.0	39.5	38.4	21.5	31.8
友人関係	9.2	7.7	8.5	11.3	23.1	5.6	0.0	11.6	16.4	20.7	14.5
心身の状態	5.3	13.8	9.2	20.8	15.4	5.6	0.0	16.3	8.5	5.8	9.3
その他	7.9	7.7	7.8	7.5	0.0	5.6	0.0	5.8	4.0	3.3	5.1
無回答（悩みがないと答えた人）	36.8	40.0	38.3	20.8	23.1	5.6	50.0	18.6	30.5	34.7	31.6

4−3　それらについて相談できる人が身近に

（数字は％）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
いる	82.9	56.9	70.9	60.4	61.5	55.6	100.0	60.5	66.1	65.3	66.3
いない	3.9	18.5	10.6	30.2	30.8	22.2	0.0	27.9	15.3	13.2	15.6
その他	1.3	1.5	1.4	1.9	0.0	16.7	0.0	4.7	3.4	0.8	2.5
無回答	11.8	23.1	17.0	7.5	7.7	5.6	0.0	7.0	15.3	20.7	15.6

4−4　悩みや課題について、学生相談室を利用したいと思いますか

（数字は％）

	音楽学部			美術学部					デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	工芸・彫刻	アートクリエーター	美術文化	計			
すぐにでも相談に行きたい	1.3	1.5	1.4	1.9	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.8	0.8
近いうちに相談に行きたい	1.3	3.1	2.1	5.7	0.0	11.1	0.0	5.8	2.8	2.5	3.0
いつか相談に行きたい	14.5	15.4	14.9	15.1	38.5	22.2	50.0	20.9	20.3	23.1	19.6
必要を感じたら行きたい	52.6	52.3	52.5	58.5	53.8	50.0	50.0	55.8	58.2	50.4	54.5
今のところ必要と感じない	25.0	21.5	23.4	17.0	7.7	16.7	0.0	15.1	15.8	19.0	18.5
その他	0.0	1.5	0.7	1.9	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.8	0.6
無回答	5.3	4.6	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	3.3	3.0

4. 本学での生活について

本学での生活にかかわる「履修の仕方や勉強の仕方について」の理解度や不安、「勉強に対する意欲」「親しい友人」の有無について尋ねた結果を**表4**に示した。

まず、「履修の仕方や勉強の仕方について」は、「よく分かる」「だいたい分かる」とする者は25.6%であり、70%以上の者が「少し分からないところがある」「ほとんど分からず不安である」としている。入学後にオリエンテーションの機会を作り履修について丁寧な説明が行われる中で、これらの不安は順次解消すると思われる。高校に比べて自由に自分で履修を組み立てることができることに戸惑いを覚える新入生はおり、学生相談室にも4月には「履修について」の相談内容で来室している。「単位とは何か」「履修便覧の見方が分からない」など一斉説明では十分に理解することが難しい学生もいるため、新入生に対する一層のきめ細やかな就学上のガイダンスが望まれる。

次に、「勉学に対する意欲」では、90%を超える者が「充分にある」「少しある」と回答しており、「あまりない」「まったくない」とする者は1.2%に過ぎない。これは例年同様の傾向を示しており、新入生は高い意欲をもって入学してきているといえる。

また「親しい友人」の有無については、何らかの形でもっているとする者（「同性にも異性にもいる」「同性のみいる」「異性のみいる」とする者）が、今年度もどの学部も80%前後を占めていた。この結果は、本学新入生の大多数が精神的安定や、豊かな学習・生活環境を得るための有用なリソースとしてのchumやpeerを獲得していることを示唆しており、好ましい傾向であることは既に指摘してきた（後藤他, 2007、佐藤他, 2008、2009　橋本他, 2010）。

一方で学部、コースごとの詳細を検討すると【絵画】（17.0%）、【人間発達】（11.6%）、【音楽文化創造】（10.8%）は、10%を超える割合で「（親しい友人は）ほとんどいない」と答えている。【工芸・彫刻】においては、30%を超えている。友人が少ないことそのものが直ちに問題であるとは思わないが、これはある意味では、例えば大学生活に上手く適応することが難しいといった問題を孕んでいる。

鍋田（2012）は、現代の思春期・青年期に見られる現代型うつ病・不全型神経症・ひきこもりを論述している。その中で、彼らに共通して見られる特徴として、主体性・社会性・コミュニケーション能力の低下を挙げている。対人緊張に関しては、従来の青年期に見られた対人緊張とは異なり、現代では「漠然たる対人緊張」で、何となく対人関係に敏感あるいは対人関係が苦手という回避傾向が強くなっていると述べている。「（親しい友人は）ほとんどいない」を選択した者が、鍋田（2012）が述べているこの特徴に必ずしも一致しているとは限らない。しかし、学生相談室では「友人がほとんどできず孤立している」「自分から話しかけられない」「人前に出るとひどく緊張する」といった不安の言葉はよく耳にする。そのような学生を見ていると、彼らの抱く不安は、見知らぬ他者や群れに対する子どもが抱くようなおびえや戸惑い（鍋田, 2012）に近似しているように思われる。ある

いは、対人交渉における意識が「周囲に対する恥の意識」から「周囲に対するおびえの意識」に変化しているのであろう（西田, 1968）と言えるのかもしれない。「（親しい友人は）ほとんどいない」学生の入学後の生活や適応状況を注意深く見ていく必要があると思われる。

5. 現在の心境について

「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすること」の有無、「困っている内容」（複数選択＝３項目以内）、それらを相談することのできる人の有無および学生相談室の利用の意向を尋ねた結果を**表５**に示した。

「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすること」があるとする者（「大いにある」および「少しある」の合計）は、67.5％を占めており、例年に比べやや減少が見られる（06年度83.5％→07年度26.3％→08年度83.5％→09年度78.7％→10年度82.5％）。各学部間のばらつきは見られ、＜美術＞では80％を超える者が「大いに」「少し」は悩みがあると答え、＜人間発達＞では60％程度に留まっている。この差異も、芸術学部と幼児・教育系学部の特質の差を反映しているものと推測される。作品を制作する過程の中で、自分の内面や問題と向き合い、それを形にするという者が、芸術を志す学生の中にはいる。幼稚園教諭や保育士、小学校教員を目指すといった、目的が明確である＜人間発達＞の学生に比べ、自己への問いを課せられる＜美術＞の学生が、より自分の内面や問題に向き合いやすい傾向があるのではなかろうか。

また、「困っている内容」（複数選択＝３項目以内）については、大学全体としては、「学業」が第１位（43.6％）、次いで「進路」が第２位（31.8％）、以下は「経済的問題」（18.1％）、「友人関係」（14.5％）、という順で選択され、各学部・コース間で選択順位・選択率ともに大きな差異は見られない。大学生活の中で学業と研究の比重は高い。高い学習意欲を有している新入生でも、これまで高等教育とは異なる大学での学業に不安を覚えることは、むしろ自然なこととも考えられる。また「自分の進路はこれで本当に良かったのか」と悩むことは十分に考えられる。この学業や進路に不安を抱いた者の中には、即断できないが「合格するとは思っていなかったが、受験したら合格したので進学した」といった、基礎学力を十分に身につけていない者もいると思われる。一般入試に加え、推薦入試やAO入試など、大学入試の形態が多様化する中で、個別学力試験を受けることなく入学する学生もいる。このように学業に不安がある学生に対して、個別の対応、少人数講義や補習授業で対応することで不安の軽減に繋がる可能性もあると思われる。

次に、悩みを相談できる人の有無について尋ねたところ、「いる」とする者が66.3％、「いない」とするものが15.6％、残りは「その他」「無回答」（計18.1％）である。学部・コースによっては30％を超える者が「いない」を選択している。また「無回答」になる割合が、他の質問項目に比べて最も高くなる項目になっている。このことから、「相談できる人がいる、いない」という質問に答えることは、学生にとって、かなり抵抗感を持たれる質問

であるように思われる。いざ「相談できるか、どうか」を尋ねられると、友人はいるが相談できる程の関係ではないなどの、自身の対人関係の持ち方について考えさせられる質問項目となりやすいのではないだろうか。ここでも、学生相談室の関心は「いない」と答える者や「その他」「無回答」の者に向けられる。学生相談室が、気楽に来談できる場となるように、従来型の精神療法だけでなく、学生相談室から発信できるグループワークなどを併用し学生支援にあたりたいと考えている。

なお、学生相談室の利用についての意向を尋ねたところ、「すぐにでも相談に行きたい」「近いうちに相談に行きたい」とする者は3.8%であり、「必要を感じたら相談に行きたい」とする者が54.5%を占めていた。

本学生相談室では、入学時に相談室ガイダンスと本アンケート調査を実施し、その後、相談室からの“様子伺い”のお便りを希望する学生に対して、6月中旬に発送している。学生相談室の紹介と“必要があればいつでも来談をどうぞ”といった意味を込めた文書である。また、新入生向けのイベントも企画している。一人暮らしをはじめる者へのアドバイス、新入生の疑問や困っていることに対して在学生が答えるといった形のイベントを、5月の連休後に学生支援課、保健室、学生相談室、自治会を含めた共同企画で実施している（「新入生応援企画 welcome to 名芸」）。しかし、このような働きかけが学生の自発来談に結びつくことは、これまでには極めてまれであった。相談室というリソースを必要としている学生に必要な情報や支援を届けるためには、相談室からの積極的な働きかけと教職員との連携が今後一層必要となると思われる。

結語

今年度の新入生アンケート結果について報告した。基本的には従来の傾向と大差なく、学部間に差は見られるものの、多くの学生が高校時代を満足できる状態で過ごし、勉学に関して非常に高い意欲を持って入学してきていることが示された。「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりする」学生の比率は減少傾向にあり、また、受験期に関しては「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と回答した学生の比率が58.3%と、従来に比べ最も低くなっていた。入学時の悩みとしては、学業や進路への不安が上位に挙がっていた。

大学進学率が50%を越え、各種入試形態により多様な学生が入学してくる現状を考えると、大学側の支援体制の更なる拡充が求められる。そのような中で、心の専門機関としての学生相談室の役割も重要になってくると思われる。重い精神疾患や発達障害の特性を持つ学生に対して必要なサポートを提供すると共に、自主来談の学生への対応はもとより、潜在的に支援を必要としながら相談室に繋がっていない学生に対して、教職員と連携しながら、積極的な情報発信と働きかけを行っていくことが、今後の課題として改めて明確となった。

文献

後藤倬男・橋本裕明・粟津幹子・加藤友希恵・橋本容子・北岡智子　2007　新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察．名古屋芸術大学研究紀要　28　97 － 105.

橋本容子・北岡智子・菅嶋康浩・佐藤勝利・後藤倬男・粟津幹子　2010　2009 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察．名古屋芸術大学研究紀要　31　355 － 364.

文部科学省　1992 ～ 2011　学校基本調査

文部科学省　2012　学校基本調査速報　http://www.estat.go.jp/SG1/estat/List.do?tid=0000010409208

鍋田恭孝　2012　思春期・青年期の病像の変容の意味するもの／「やみ切れなさ」「症状の出せなさ」―現代型うつ病・不全型神経症（軽症対人恐怖症など）・ひきこもりから考える－．精神療法　38（2）164 － 171.

西田博文　1968　青年期神経症の時代的変遷－心因と病像に関して．児童精神医学とその近接領域　9（4）225 － 252.

佐藤勝利・後藤倬男・粟津幹子・加藤友希恵・橋本容子・北岡智子　2008　2007 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察．名古屋芸術大学研究紀要　29　165 － 174.

佐藤勝利・後藤倬男・粟津幹子・橋本容子・北岡智子　2009　2008 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察．名古屋芸術大学研究紀要　30　131 － 140.

佐藤勝利・粟津幹子・林美由記・伊藤由夏・木村美奈子・北岡智子・菅嶋康浩・山内恵理子　2011　2010 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察．名古屋芸術大学研究紀要　32　169 － 178.

山崖俊子　2012　学生相談の役割－私が大切にしてきたこと－．学生相談研究　33（1）72 － 83.